The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	タイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得 ： 「動詞＋lεεw」のグループに着目して
Author(s)	ドゥアンケーオ, パオサタポーン
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 44-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

タイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得
―「動詞＋lέεw」のグループに着目して―

ドゥアンケーオ　パオサタポーン

1. 研究の概要

「テイル」はよく使用される文法形式であるが、タイ人日本語学習者にとって難しく、習得するのが困難な文法項目だと言われている。「テイル」の主な用法として、「進行[i]」と「結果状態[ii]」の 2 つの分類が挙げられるが、「進行」より「結果状態」の方が習得が困難であると今までの研究において明らかになっている（黒野 1995、許 1997、菅谷 2004 など）。しかし、タイ人日本語学習者の「テイル」の習得状況に関する研究はまだ少ない。ピャマーワディー（1981）では、タイ語と日本語のアスペクトの比較対照をしているが、タイ人日本語学習者の「テイル」の習得状況を扱った研究は、タサニー（2000）とドゥアンケーオ（2013）しか見当たらない。

そこで、本研究では、「テイル」の中心的な用法の一つでしばしば誤用される「結果状態」に着目し、言語理解能力を測る文法テストとフォローアップ・インタビューを用いてタイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得状況を明らかにしたい。

2. 先行研究

「テイル」の習得について、これまで多くの研究が行われてきた。「テイル」の中心的な用法である「進行」と「結果状態」の習得順序について、発話資料と文法テストを用いた調査が行われた結果、「進行」の方が「結果状態」より習得が早いと報告された研究が多い（黒野 1995;　許 1997,2000;　菅谷 2004;　松井 2008;　孫他 2010）。また、「テイル」の習得を困難にする要因に重点を置く研究もされている（簡他　2010）。タイ人日本語学習者を対象とするアスペクト「テイル」の研究には、タサニー（2000）とドゥアンケーオ（2013）がある。ここでは、タイ人日本語学習者を対象としたタサニー（2000）とドゥアンケーオ（2013）を紹介したい。

2.1　タサニー（2000）の研究

タサニー（2000）は、タイ人日本語学習者 101 人による日本語作文と、タサニー自身によるそのタイ語訳を取り出して、タイ人日本語学習者の（テイルを含む）アスペクト表現の使用状況と誤用の要因を分析している。タサニーは、誤用の要因の一つとして「タイ語と日本語のアスペクトに対する認識の違い」があると結論付けている。その結論の中から「テイル」に関係すると考えられるものを以下に引用する。

1）日本語では、「テイル」は継続性、パーフェクト性、反復性の意味を表わしている

のに対し、タイ語では、「kamlang[iii]」は継続性の進行を、「yuu」は継続性と反復性を、そして、「lEEw[iv]」はパーフェクト性を表わす。つまり、日本語では、「継続性」「パーフェクト性」「反復性」の継続を共通項として捉えているが、タイ語ではそれぞれの概念を別のものとして捉える。タイ語話者のアスペクト表現の誤用は少なくとも両言語間の継続性とパーフェクト性で表現される領域にずれがあることに起因すると考えられる。

2）個々の動詞を見た場合、動詞の語彙的意味とアスペクト形式との相関性にも違いが見られる。特に、変化動詞では「ル」形は未実現の意味しか持たない。実現した変化状態を表すには「テイル」を伴っている必要がある。タイ語の変化動詞は実現した変化状態を表しているので、基本形のままで用いられる。また、「テイル」形は恒常的な状態や性質を表わす形式としても用いられ（例えば、山がそびえている、あの人は変わっているなど）、習得の段階で記憶されなければならない。

タサニー（2000）では、タイ人日本語学習者の「テイル」の全体的な習得状況は分析されているが、「結果状態」における誤用の要因は表面的にしか分析されていない。しかも、その分析では、学習者から直接聞いたフォローアップ・インタビューなどによるものではなく、タサニー自身が日本語学習者の書いた作文を見て分析しているため、学習者の「誤用の要因」を分析するには不十分であると考えられる。

2.2　ドゥアンケーオ（2013）の研究

ドゥアンケーオ（2013）は、タイの大学で日本語を専攻している大学生 51 人を対象とし、「テイル」の中心的な用法である「進行」と「結果状態」のどちらの習得がタイ人日本語学習者にとってより困難であるかを文法テストを用いて調べた。また、「テイル」における「習得を促す要因」と「誤用の要因」をフォローアップ・インタビューを用いて調べた。その結果、以下の点が明らかになった。

1）先行研究と同じようにタイ人日本語学習者にとって「結果状態」の用法は「進行」の用法より習得が困難である。

2）タイ人日本語学習者の「テイル」の習得において見られた「習得を促す要因」は、「母語の影響」「言語処理のストラテジー」「授業外での日本語との接触」「インストラクションの影響」であると考えられる。

3）タイ人日本語学習者の「テイル」の習得において見られた「誤用の要因」は、「母語の影響」「言語処理のストラテジー」「言語内エラー」であると考えられる。

ドゥアンケーオ（2013）の問題点を以下にまとめる。

1）「結果状態」における文法テストの問題数が非常に少なく、タイ人日本語学習者の習得状況を分析するのに不十分である。

2）母語であるタイ語の干渉が「結果状態」の「テイル」の習得に影響を与えていると述べているが、その説明への根拠がなく信憑性が高いとは言い難い。

以上のことから見られるように、日本語の「テイル」への理解の不十分さ、タイ語からの影響など、アスペクト「テイル」の習得に影響を与える要因は様々であるが、これらの要因がタイ人日本語学習者が「テイル」を学習する際にどのように影響を与えるかを分析する研究はまだ少ない。特に習得が困難である「結果状態」の習得状況とその要因を明らかにするには、今までの研究だけでは十分解決できているとは言いがたい。そこで、本稿では以上のことを踏まえて、今まで行われてこなかったタイ人日本語学習者における「結果状態」の「テイル」の習得状況と習得に影響を与える各要因に関する詳細な分析を行い、それらを明らかにしていきたい。特にタイ人日本語学習者の母語であるタイ語の影響を受けて生じたと考えられる誤用に着目する。

3.「結果状態」に対応するタイ語の文法形式

アスペクト「テイル」の「結果状態」の用法の分類の基準は文法学者によって様々であるが、本研究ではタイ人日本語学習者の習得状況と習得に影響を与える要因を明らかにすることを目的にしているため、「結果状態」の用法を「対応するタイ語の文法形式」において分類することにした。本稿では、ドゥアンケーオ（2013）の分類を改善し以下の通り分類することにする。

表 1　本稿で扱う「結果状態」の「テイル」に対応するタイ語の文法形式

対応するタイ語の文法形式	属するタイ語の動詞	例文
(A)　「動詞＋lɛ́ɛw^{v}」	結婚する(tɛŋŋaan)、婚約する(man)、 慣れる(chin)、始まる(rəəm)、 届く(thuŋ)、遅刻する(saay)	chan　tɛŋŋaan　lɛɛw 私　結婚する　(完了) 私は結婚している
(B)　「動詞（＋yùu^{vi}）」	（ドアが）開く(pəət)、（テレビが）点く(pəət)、壊れる(siia)、落ちる(tok)、 行く(pai)、倒れる(lom)、ほどける(lut)	thiiwii　phaŋ　yuu テレビ　壊れる　いる テレビは壊れている

以上の表から分かるように、日本語における「結果状態」を表わすのに「テイル」が用いられるのに対し、タイ語においては「動詞＋lɛ́ɛw」「動詞（＋yùu）」という 2 つの文法形式が用いられる。すなわち、この 2 言語間の違いが、タイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の習得に影響を与え、誤用を生じさせてしまう可能性も十分あると言える。

4. 本調査

4.1　調査目的

1）中・上級タイ人日本語学習者における「結果状態」の「テイル」の誤用の要因を探る。また、それらの要因がどのように「結果状態」の「テイル」の習得に影響を与えているか

を探る。

2)「結果状態」の「テイル」における各動詞の正答率が異なる場合、その要因を探る。

4.2　調査対象者

本調査の文法テストの調査協力者は、タイのタマサート大学教養学部日本語学科で日本語を専攻している大学生 100 名である。中・上級日本語学習者を対象とするために日本語能力試験 N3 以上を取得した学生に絞った。フォローアップ・インタビューの調査協力者は、文法テストを受けた協力者の中から 23 名に依頼し実施した。

4.3　調査期間

2014 年 8 月 18 日から 2014 年 9 月 5 日にかけて実施した。

4.4　調査方法

資料収集方法は、(1) 調査紙による文法テストと (2) フォローアップ・インタビューという 2 つの段階から成り立っている。文法テストは、「結果状態」の「テイル」を使うべき時正しく選択できるかどうかを測るために実施する。しかし、文法テストで正しく選択できたとしても、調査協力者が正しく「テイル」に関して正しい知識を持っているとは限らない。フォローアップ・インタビューは、文法テストだけでは測ることができない「調査協力者が正しく「テイル」を理解できているかどうか」を測るために実施する。それぞれの詳細は以下の通りである。

4.5　文法テストの構造及び設問の詳細

本調査においては、「多肢選択テスト」を用いた。文法テストの問題数は総 20 問ある（稿末資料を参照されたい）。内訳は、「動詞＋lɛ́ɛw」のグループと「動詞＋yùu」のグループの問題がそれぞれ 7 問ずつあり、残りの 6 問は、「結果状態」の「テイル」の習得に関する調査であることを調査協力者に悟られないように入れたダミー問題である。本調査では、調査協力者に正しいと思ったものをすべて選択させた。

4.6　文法テストとフォローアップ・インタビューの実施状況の詳細

文法テストの制限時間は 20 分と定めた。文法テストを実施した後に、フォローアップ・インタビューに協力してくれる人に連絡先を教えてもらい、それぞれ 1 週間以内に 1 人ずつフォローアップ・インタビューを実施した。 1 週間以内にフォローアップ・インタビューを実施する理由は、時間が経てば、調査協力者が文法テストを受けている時の選択理由などを忘れてしまう可能性があるからである。フォローアップ・インタビューはすべてタイ語で行った。フォローアップ・インタビューをタイ語で実施した理由は、選択理由や頭

の中で考えたことなどを説明するのに調査協力者にとって最も得意な言語であるタイ語を利用するのが最適であると考えたからである。フォローアップ・インタビューの質問は主に「テイル」と「タ」への理解に関するものであり、1 人の調査協力者に約 20 分の時間を設けた。

5. 調査の結果と考察

5.1 各用法の「テイル」の選択率

本調査では、「結果状態」の「テイル」に対応するタイ語における分類に従い、「動詞＋léεw」と「動詞＋yùu」という 2 つのグループに分けている。両グループの選択率[vii]は以下の通りである。

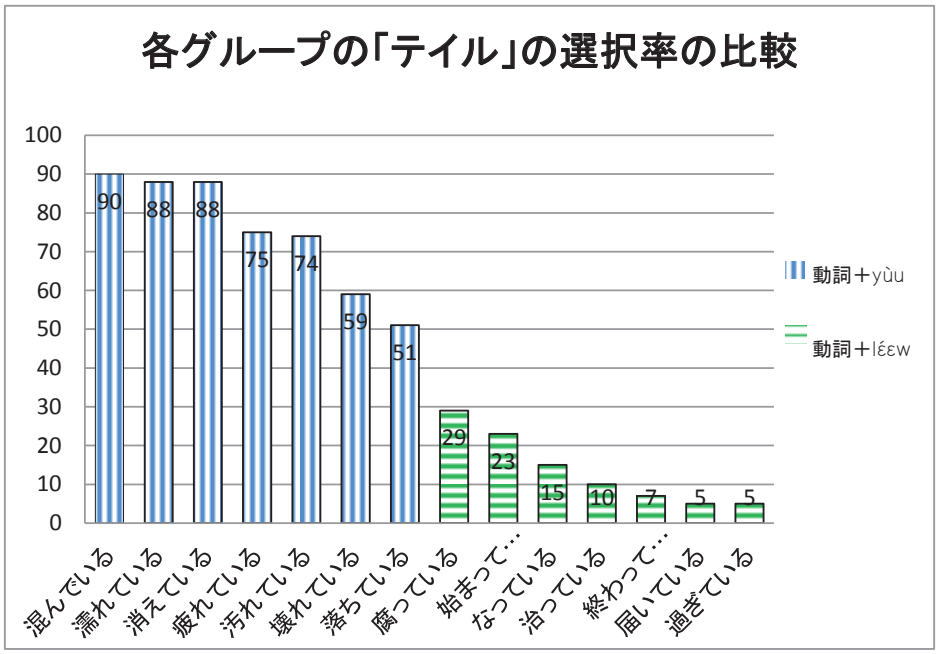

図 1　各グループの「テイル」の選択率の比較

図 1 から分かるように、「動詞＋léεw」と「動詞＋yùu」に分けることにより、各グループの「テイル」の選択率が大きく異なっていることが分かる。この結果から、タイ人日本語学習者が「結果状態」の「テイル」を学習する際、「動詞＋yùu」のグループより「動詞＋léεw」のグループの方が習得が困難であると言えよう。本稿では、より習得が困難である「動詞＋léεw」のグループの習得状況に着目する。

5.2 「動詞＋léεw」のグループ

「動詞＋léεw」のグループに属する動詞は「腐っている」「始まっている」「なっている」「治っている」「終わっている」「届いている」「過ぎている」である。このグループに属する動詞の選択率はどれも 3 割に達しておらず、特に「終わっている」「届いている」「過ぎ

ている」は 1 割にも達していない。「動詞＋yùu」のグループに比べて習得が困難であると考えられる。なぜこのような結果になったか、フォローアップ・インタビューの結果を参考にしながら考察する。このグループにおいて最も多く挙げられた選択理由と「動詞＋lɛ́ɛw」のグループにおける調査協力者の選択を以下にまとめる。

1）その出来事が過去に起きたから、「タ」が正しい（例 :「届く」: 23 人中 20 人、「治る」: 23 人中 18 人、「過ぎる」: 23 人中 22 人）

2）「テイル」だと「進行」を表すから、「タ」が正しい（例 :「届く」: 23 人中 18 人、「治る」23 人中 20 人、「過ぎる」: 23 人中 19 人）

表 1　「ル」「タ」「テイル」「テイタ」を選択した調査協力者の人数

動詞	ル	タ	テイル	テイタ	合計
始まる	6	84	23	12	125
届く	0	92	5	11	108
治る	5	81	10	17	113
腐る	9	62	29	18	118
終わる	8	87	7	4	106
なる	7	76	15	21	119
過ぎる	7	89	5	5	106

表 1 から分かるように、このグループにおいては、6 割以上の調査協力者が正答の「テイル」ではなく「タ」を選択していることが分かった。特に、「始まる」「届く」「終わる」「過ぎる」における「タ」の選択率は約 9 割になっている。フォローアップ・インタビューにおける「なぜ「タ」を選択したのか」という質問に対する調査協力者の最も多い選択理由は「その出来事が過去に起きたから、「タ」が正しい」である。例えば、「届いた」の選択理由として「「カバンが届く」という出来事が過去に起きたから、「届いた」が正しい」と答えた調査協力者が 23 人中 20 人もいた。つまり、日本語においては出来事を「現在の状態」として捉えるのに対し、タイ人日本語学習者は同じ出来事を「現在の状態」ではなく「過去に起きた出来事」と捉えていることが窺える。なぜタイ人日本語学習者はこのような捉え方をするのだろうか。一つ考えられるのは母語であるタイ語の影響である。このグループの「結果状態」の「テイル」には、タイ語の「lɛ́ɛw」が対応する。「lɛ́ɛw」はタイ語教育では「完了」を表すと言われているが、タイ語母語話者[viii]の中に「完了」ではなく「過去」と認識している人が多いことが考えられる。そのため、「電車が（降りたかった駅を）過ぎている」などのように日本語では「結果状態」の「テイル」が使用される場面に遭遇する際、タイ人はタイ語からの概念に影響されて「現在の状態」ではなく「過去」と（間違えて）捉えて「タ」を使用してしまうことが考えられる。

また、フォローアップ・インタビューを実施した後に、「結果状態」の「テイル」の概

念である「過去に出来事が起きて、その出来事の結果が「状態」として現在まで続いている」という説明をした結果、「なぜ「状態」と捉えられるのか分からない」とほとんどの調査協力者が述べている。つまり、日本語では「状態」として捉えるにもかかわらず、タイ語では本調査の文法テストで扱った場面を「状態」として捉えないため、タイ語を母語とする本調査の調査協力者にとってはこれらの場面を「状態」として捉えるのが非常に難しいと考えられる。

それに、「「テイル」だとどういう意味になるのか」という質問に対する調査協力者の最も多い選択理由は「その出来事の最中」である。例えば、「「治っている」は「まだ傷が治っていなくて、治りかけている。つまり、魔法を使って治すみたいに傷が塞がろうとしている。」と答えた調査協力者が 23 人中 20 人もいた。フォローアップ・インタビューを通して、本調査の調査協力者にとってこのグループの動詞の「テイル形」は「結果状態」より「進行」との結びつきの方が強いことが分かった。これらの要因がタイ人日本語学習者が「結果状態」の「テイル」を初級の段階で学習するにもかかわらず、中・上級に入ってもなかなか習得できない主な理由であると考えられる。以下の図 2 が「動詞＋lɛ́ɛw」のグループがなぜタイ人日本語学習者にとって習得が困難なのかをまとめたものである。以下の図 2 は、誤用の要因は①タイ語の影響を受けた誤用（言語間エラー）と②日本語の中で起きた誤用（言語内エラー）に分けられる[ix]。

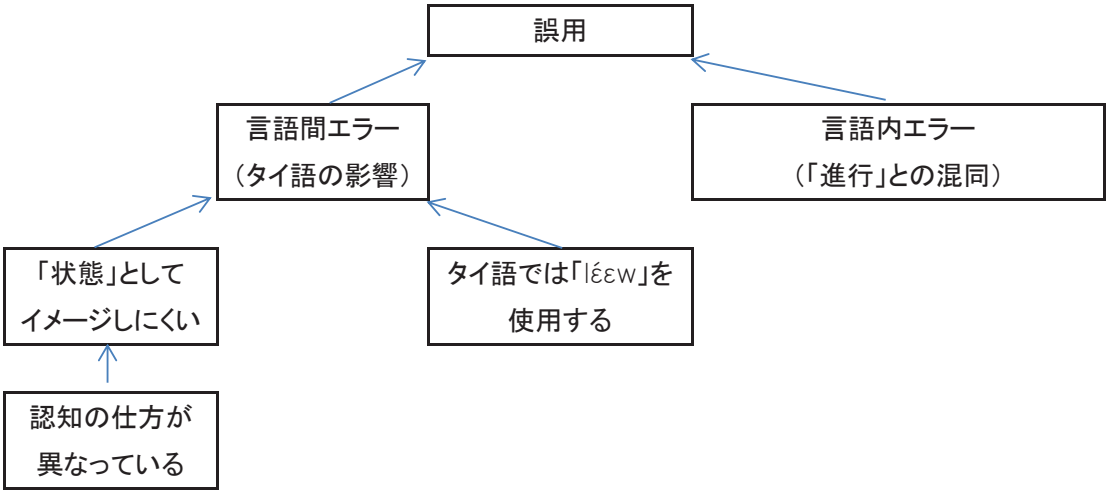

図 2「動詞＋lɛ́ɛw」のグループがなぜタイ人日本語学習者にとって習得が困難なのか

フォローアップ・インタビューにおける最も多い選択理由が「その出来事が過去に起きたから、「タ」が正しい」であることから、母語であるタイ語の影響が最も大きいことが考えられるのではないだろうか。そこで、「lɛ́ɛw」に関する間違った知識について詳しく説明を加えたい（下記の図 3 を参照されたい）。

まず、前述の通り、タイ語の助動詞の「lɛ́ɛw」は「完了」を表すが、多くのタイ語母語話者が「完了」ではなく「過去」と認識している人が多い。そのような認識を持ったまま

日本語を学習し、「結果状態」の「テイル」を使う場面に遭遇した際、タイ語の知識や認識の方法を適用しようとする。「結果状態」の場面においては、日本語母語話者は「状態」として捉えるが、タイ語母語話者は（正しいのは「完了」であるが）「過去」として捉えてしまう。そして、初級の段階で教わった「タ形＝過去」という概念を適用して、誤用をしてしまうことになるのである。学習者が第二言語を学習する際には、第一言語の知識や概念を利用することによって習得につながる「正の転移」も起これば、逆に第一言語の知識や概念を利用することによって誤用につながる「負の転移」も起こりうる。本稿では、調査結果を教育的示唆については詳しく触れる余裕はないが、本調査の結果から見ると、タイ人の日本語教師が「結果状態」の「テイル」を導入する際、日本語の「結果状態」の「テイル」の概念だけではなく、タイ語の「lɛ́ɛw」の意味用法（特に「「lɛ́ɛw」は「過去」ではなく「完了」である」ということを強調して）などを説明しそれと比較しながら導入した方が効果的であると考えられるのではないだろうか。

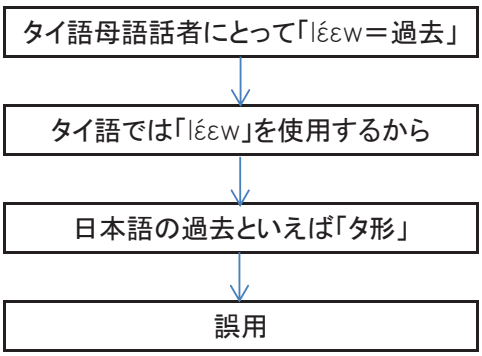

図 3　「lɛ́ɛw」による誤用の要因

6. まとめ

文法テストとフォローアップ・インタビューによって見られた、タイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の「動詞＋lɛ́ɛw」のグループの習得に影響を与えると考えられる要因を以下にまとめる。

①日本語においては「状態」として捉えるにもかかわらず、タイ語では本調査の文法テストで扱った場面を「状態」として捉えないため、タイ語を母語とする本調査の調査協力者にとってはこれらの場面を「状態」として捉えるのが非常に難しくて、「状態」ではなく「ただの過去」と捉えて「タ」を選択してしまうことが考えられる。

②このグループの「結果状態」の「テイル」にタイ語の「lɛ́ɛw」が対応する。「lɛ́ɛw」はタイ語教育では「完了」を表すと言われているが、タイ語母語話者の中に「完了」ではなく「過去」と認識している人が多いことが考えられる。そのため、「電車が（降りたかった駅を）過ぎている」などのように日本語では「結果状態」の「テイル」が使

用される場面に遭遇する際、タイ人はタイ語からの概念に影響されて「現在の状態」ではなく「過去」と（間違えて）捉えて「タ」を使用してしまうことが考えられる。

③本調査の調査協力者にとってこのグループの動詞の「テイル形」は「結果状態」より「進行」との結びつきの方が強いことが分かった。

本調査では、タイと日本に住む日本語学習者を対象に、文法テストとフォローアップ・インタビューを用いてタイ人日本語学習者の「結果状態」の「テイル」の「動詞＋lέεw」のグループの習得状況の分析を試みた。今後の課題として、タイ語の影響を考慮した効果的な教え方を考えたい。

【参考文献】

簡弁雯、中村渉（2010）「『テイル』の習得過程に関する事例研究―難易度を左右する要因を中心に―」『国際文化研究』16、pp.45-56

許夏珮（1997）「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95、pp.37-48

_____（2000）「自然会話における日本語学習者による「テイル」の習得研究―OPI データの分析結果から―」『日本語教育』104，pp.20-29

_____（2005）『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版

工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』1-2、pp.38-47

_____（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト：現代日本語の時間と表現』ひつじ書房

黒野敦子（1995）「初級日本語学習者における『-テイル』の習得について」『日本語教育』87、pp.153-164

江田すみれ（2013）『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト―異なるジャンルのテクストにおける使用状況とその用法―』くろしお出版

迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク

菅谷奈津恵（2003）「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究―『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に―」『日本語教育』119、pp.65-74

_____（2004）「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究―L1 の役割の検討―」『日本語教育』123、pp.56-65

_____（2005）「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観―『動作の持続』と『結果の状態』のテイルを中心に―」『言語文化と日本語教育 2002 年 5 月特集号』、pp.70-86

砂川有里子（1986）『日本語文法セルフマスターシリーズ 2　する・した・している』く

ろしお出版
タサニー・メーターピスィット、坂田睦深、アルニー・チュンシリウィロート（2000）「タイ人日本語学習者のアスペクト表現」『日本語とアジア諸言の作文対訳コーパス：対照言語学・日本語教育への応用』、pp.81-94.国立国語研究所
ドゥアンケーオ・パオサタポーン（2013）「タイ人日本語学習者の「テイル」の習得―「動作の持続」と「結果の状態」を中心に―」大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻修士論文
仁田義雄（2009）『日本語の文法カテゴリをめぐって』ひつじ書房
日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法 3』くろしお出版
ピャマーワディー・ラチャニー（1981）「日・タイ語におけるテンスとアスペクトの比較対照―「～ル」「～タ」「～シテイル」「～シテイタ」について―」『日本語教育』44,pp. 81-88

＜稿末資料＞

文法テストの例

1.（太郎が大学から家に帰ってきた）

太郎：は～、今日は疲れたー。

（部屋の中を見て）あ！この間注文したカバンが_____！

【1. 届く　　2. 届いた　　3. 届いている　　4. 届いていた】

---

i「テイル」の習得に関する今まで先行研究では「動作の継続」や「動作の持続」と表示されることが多いが、本稿では「進行」と表示する。

ii「テイル」の習得に関する今までの研究では「結果の状態」と表示されることが多いが、本稿では「結果状態」と表示する。

iii本研究では、「kamlaŋ」と書くが、意味は同じである。

iv本研究では、「lɛ́ɛw」と書くが、意味は同じである。

v「lɛ́ɛw」は「完了」を表すタイ語の助動詞である。

vi「yùu」は日本語の「ある」や「いる」と同じように「存在」を表すタイ語の助動詞である。

vii調査協力者が正答である「テイル」を選択できても、「結果状態」の「テイル」に関する正しい知識を持ち習得が進んでいるとは限らない。そのため、本調査の調査結果の段階では、「正答率」ではなく「選択率」を用いており、「結果状態」の「テイル」の習得が進んでいるかどうかに関してはフォローアップ・インタビューの結果を合わせた考察でしている。

viii本研究では「タイ人日本語学習者」と「タイ語母語話者」という言葉が使われているが、「タイ人日本語学習者」は「日本語学習経験があるタイ人」を、「タイ語母語話者」は「日本語学習経験の有無を問わない一般的なタイ人」を指している。

ix迫田（2002）は、誤用の分類方法の一つとして、「言語間エラー」と「言語内エラー」という分類を挙げている。言語と言語の間に問題があって生じる誤用、つまり母語の影響によって起きる誤用を「言語間エラー」といい、学習している言語の中で活用を間違えるなどの誤用を言語内エラーという。